

## 会 議 録

会議名称	第2回柳川市民文化会館（仮称）基本計画検討委員会
日 時	平成26年12月27日（土） 10:00～11:40
会 場	柳川市民会館 第2会議室
出席者	<p>[委 員] 武末委員、森田委員、姉川委員、草場委員、          椛島（道）委員、安永委員、生田委員、古賀（俊）委員、          大橋委員、野田委員、椛島（和）委員、甲斐田委員、          勝見委員、今村委員、黒田委員、古賀（弥）委員、          大森委員、齋藤委員</p> <p>[事務局] 大坪総務部長、椛島企画課長、野田企画係長、          企画課企画係 江口          松尾生涯学習課長、堤文化係長、生涯学習課文化係 須崎、          (株)シアターワークショップ 伊東、今川</p>
欠席者	[委 員] 立花委員、古賀（理）委員、壇委員
議 題 等	<p>1 開会</p> <p>2 会議録の確認</p> <p>3 議題</p> <p>(1) 12月21日 市民ワークショップの協議結果について</p> <p>(2) 先進自治体のホール施設整備の動向・特徴について</p> <p>(3) 柳川市民文化会館（仮称）事業方針の検討について</p> <p>4 その他</p> <p>5 閉会</p>
会議資料	<p>資料① 第1回市民ワークショップ速報</p> <p>資料② 先進事例 参考資料</p> <p>資料③ 管理運営と事業 参考資料</p>
次回会議	平成27年1月30日（金）14時から 柳川あめんぼセンター

＜審議結果は次のとおり＞

## 1 開会

## 2 会議録の確認

## 3 議題

### (1) 12月21日 市民ワークショップの協議結果について

- ・ 次回のワークショップの議題は第1回市民ワークショップで出された「柳川じまん/柳川ふまん」の自慢できることをどう活かしていくか、不満に思っていることをよくしていくためにはどうするかを話しながら、市民文化会館にどのように活かしていくかを話してもらう予定。
- ・ 参加者6名の内訳は、1名のみ柳川市出身（旧三橋町）で、現在福岡市在住の方ですが、他は全員柳川市内在住の方。割合的には旧三橋町の方が多かった。年代は20歳代、30歳代が各1名、50歳代が3名。

### (2) 先進自治体のホール施設整備の動向・特徴について

- ・ 茅野市の人口は5万人程度、北上市は約10万人。
- ・ 三次市の人口は合併して5万人弱だったと思う。計画段階での参加は言いたいことを言えるので楽しいが、開館後は責任を持って言ったことを実行する、運営するのは苦しいということで引いてしまいがち。いかに情熱を冷まさずに継続させるかが大事。市民ボランティアといっても事務局は専属のスタッフを抱えることが必要。茅野や北上でも運営主体から事務局スタッフ1名出している。人件費、活動スペースなどを保障することが必要。市民に活動をやれと言ってもできないので、専従でできる人を確保することが必要。
- ・ 茅野市では、市民が椅子に座ってステージの高さの検証を行っていた。茅野の市民ワークショップメンバーに建築家の方が入っていた。コンサートホールはステージが低いので、本当に見えるのか検証を行ない、舞台の高さを変更した。
- ・ 茅野市の可変劇場は一般の貸館では活用されない。どう使うかは利用する人が決める。使う人たちである市民が劇場の特色を良く知っているので、自分たちで工夫して使おうとしている。
- ・ いろいろな設備があっても使われないことは往々にしてある。そのような意味からも茅野はうまく行っている事例。
- ・ 三原市のホールは多目的ホールでも専用ホールでもない、中間のホール

を主目的ホールと呼ぶ。特定なジャンルのみは100点をとろうというホール。三原のホールは、クラシック音楽についてはかなり100点に近いコンサート寄りの主目的ホール。

- 柳川も音楽メインだと思う。音響は音響反射板のセットの有無で残響時間をかなり変更できる。音響反射板は収納場所の問題があるが、今の技術であれば邪魔にならないところに収納することができ、専用ホールではなくてもそれなりの環境をつくることできる。
- 日本が多目的のホールの技術は一番進んでいると聞いている。
- 三原のホールは1,200席だが、満席になるかどうかは誰が出演するか次第であり、人口ではない。年に何回かでも満席になればその席数が必要。最近では席数を抑える傾向で、大きなホールを小さく使っても満席感をだす工夫、より小さく使ったときに雰囲気を高める工夫がされるようになってきた。
- 稼働率ではなく、多くの人でにぎわっているということも大事。
- 芸術性も損なわれないように注意が必要。
- 運営は文化だけでなく、様々なジャンルの連携、市民ワークショップからサポーターやボランティア組織が立ち上がっていくのが重要なポイント。市民が集まってボランティア組織ができるのは難しい。
- 柳川の市民ワークショップにはサポーター、ボランティア組織が立ち上がる気運が感じられるのか、また、企画ができるように展開していく核があるのか。
- 市民ワークショップのメンバーは使っていく側の方が多かった。今後も活動に参加していこうという方々だと感じた。
- まずは楽しんで、興味をもらってもらうのが大事。ワークショップにはキーになる方が参加されていた。しかし、実際に使う側のみでは駄目で、青年会議所、まちづくりイベント、福祉など、他の分野で活動している人を巻き込んで、キーパーソンになる若い人、40歳代くらいの年代の人が必要。街を動かすのは、40歳代が中心。彼らが自分たちの活動の場となると感じられるようにできれば成功する。
- 継続していくことが必要。そのためには、他はどうなっているのかを学び、足を運ぶという活動をする。それを繰り返し、知識レベルを上げ、気運を高めていくことが重要。
- ホールの建て方、運営の仕方は、駅の近く・街中と、街から離れた田舎での違いはある。アプローチのし易さは重要な問題。茅野は駅に直結で非常に有利。北上のさくらホールは駅からかなり離れた場所だが近くに高校がある。車を運転できない高校生には近い所が有利。大人は車で動

くので、駐車場があれば集まってくる。今回の敷地は街の中心ではないが、周囲に高校が3校あり、自転車・徒歩でアクセスできるので、良い場所ではないか。

- ・ 中学・高校の若い時に出入りしていると、大人までつながっていく可能性がある。
- ・ 景観的に掘割があるのも柳川らしくてよい。
- ・ ホールは50年先まで使える。旧大和町の「大蛇山」、旧三橋町の「沖の石太鼓」、柳川市の「どろつくどん」などの地域の文化を50年先、100年先まで伝えていく拠点とするかなど、柳川の文化とはどこまでととらえるのかを考えておく必要。
- ・ 使う人は音楽・演劇の人が多。舞台に立つ人のみでなく、柳川市全体の文化芸術計画、劇場のコンセプトとして、柳川独特の文化までを考えることも必要。
- ・ 伝統芸術は地域まで含めた芸術なので、お宮で行われる演能も含めたところまでが能であり、能の部分のみステージというのは地域文化から外れる。劇場が育てる芸術文化とは全く異なる分野。
- ・ 県南に11館の公立文化施設があり、自己満足型でそれぞれが事業を行っている。久留米・小郡～大牟田のエリアで人口は合計で150万人位だが、住民に共通情報が提供されていない。
- ・ 県民文化祭を市民会館でやったが、大ホールに行くのが分かりにくいという意見が多かった。見る人の立場としてホールの位置が分かりやすいように考えてつくって欲しい。
- ・ 観客が主役の時代から、プロセスを大事にする時代に入ってきているので、市民の使いやすさは大きな問題。

### (3) 柳川市民文化会館（仮称）事業方針の検討について

- ・ 時間がおしてきたため次回に持ち越しとする。
- ・ 柳川独自の事業展開のアイデアを各自考えてきてください。

## 4 その他

- ・ 北原白秋生誕130周年記念事業として、来年1月25日に水の郷ホールで白秋サミットを開催。
- ・ 北原白秋生誕130周年記念事業、柳川市合併10周年記念事業として、佐藤しのぶコンサートを開催。

## 5 閉会